

なんでもねん

発行責任者 豊作 忠

No. 19

豊作飢饉

悪いことに、1930(昭和5)年という年は、世界恐慌と豊作とが重なった。その重なり合いは、米・マユ・野菜が売れなくなって価格が下がることと、都市に働きでた労働者が首をきられ、自分のいなかに帰れば食べられるだろうと、村に帰ってくるというかたちで現れた。



世界恐慌の波をかぶりやすい製糸工場(生糸を生産する工場)のような場合には、機械の20%を封印して止めた。そのため首をきられた労働者の7分の3が、いなかに帰ったといわれている。ある銀行の統計では、1929~30(昭和4~5)年にかけての失業者が60万人で、その半分の30万人がいなかに帰っているという。

生産物は安い、食べる口はふえる、そして、もう1つ農家経済の足を引っばったのは、肥料の問題である。日本の農業は、すでに大正ごろから、化学工場で作る化学肥料にたよりはじめていた。農家は化学肥料を買って農業をしていたのである。

さらに、このころの農家では、農機具類(リヤカーとそのタイヤ、ゴム底の地下足袋など)とか、塩・砂糖・醤油など、買う物が多くなっていた。

農家が暮らしていくためには、価格の下がり方のひどい(安い)農産物を売らねばならず、価格の下がり方のおそい(高い)工業製品を買わなければならなかった。

そのために、米では、1石(約150kg)を作るのに、その生産費は27~28円、販売価格が16円で、1石ごとに11~12円の損をする結果が生まれた。

それでは、農家はどうなるのか。まず2つのことがある。

その1つは、借金がふえることである。豊作予想発表前の1930年8月の統計でも、たとえば長野県では、20万戸以上の農家について調べて、1戸あたりの借金が868円となっている。この金額は、大学を卒業した人が、1年と数か月働いて稼げる金額で(大卒で年間の給料が約500円くらいの時代)、とてつもない大金の借金だった。

もう1つは、次の年は肥料を使うことをへらすか、あるいは、やめることである。それが、どんな影響を秋にもたらすだろう……。

凶作飢饉

1931(昭和6)年、こんどは、東北・北海道を中心に、凶作^{きようさく}がやってきた。苗代^{なわしろ}のとき、そして田植^{たうえ}のとき、あいついで冷たい雨降りの日がつづき、そのあと日照時間^{ひようじかん}が少なく、イモチ病^{いもちびょう}がはやったり、病虫害^{びようちゅうがい}がでたりした。また、ヤマセと呼ばれるオホーツク海からの風^{いね}が、稲の大敵である寒い夏をもたらした。稲は青立ち^{あおだ}となつて、穂^ほがでなかつたり、立ち枯れ^がになつたりした(いわゆる冷害^{れいかい})。青森県の下北半島の場合、平年作の3分の1から半分しか取れない田が48%、3分の1までいかない田が44%もあった。平年作の半分以上とれた田は、残りの8%しかなかった。青森県全体の調べでは、平年作の半分以下しかとれない田が51%にものぼった。

農家の経済は、豊作飢饉と凶作飢饉のダブルパンチで打ちめされた。

その結果、再び借金^{かきん}の問題^{もんだい}がおきる。宮城県桃生郡では、郡内6000戸の農家のうち、5700戸が1戸平均50円ほどの肥料代^{ひりようだい}を借りていた。この借金を返すために、次の年の春^{はる}以後の自家用米^{じかようまい}までも売ってしまう農家もあった。それでも、肥料代^{しほら}が支払えた農家はまだいいほうであった。なかには、青田のうちから抵当^{あたい}に入っている田もあり、小作米^{こさくまい}が納められなくなり、翌年^{よくねん}の小作^{けんり}の権利^{けんり}を失う農家も多かった。このほか、税金^{ぜい}の未納^{きん}や借金^{かきん}がはらえなかつたりして、さしおさえや競売^{けいばい}を受ける農家もあった。

長野県のある小作農民は、1000円の借金^{かきん}に400円の利子^{りし}がつき、それが返せず競売にされ、家財道具^{かざいどうぐ}みんな140円にたたかれ、嫁入り^{よめい}の晴着^{はれぎ}が1枚20銭だったという。その長野県では、農家の借金^{かきん}が1戸平均1500円だった(1932(昭和7)年の春)。

そして、この農民^{ひつめ}の生活^{みう}の苦しさは、ついに、「娘身売り^{むすめしり}」という現象^{げんしょう}を生み出した。金につまった父親は、数百円から千数百円の「前借金^{まえかきん}」をして娘^{むすめ}を手ばなす。娘の多くは、今の中学生・高校生の年で、その「前借金^{まえかきん}」の元金^{がんきん}と利子^{りし}を、青春期のすべてをかけて返す重い義務^{ぎむ}を負わされた。

ほとんどは、芸者^{げいしや}とか女中^{じようちゆう}として、都市の片隅^{かたすみ}でのつらい生活^{くわつ}にむかって旅立^{りふ}ていった。

山形県最上郡西小国^{もがみぐにし}という飯豊山脈^{いひいで}のふもとの静かな村では、1931(昭和6)年の秋、85人の娘が「身売り^{みうり}」され、村に娘の姿を見ることがまれになったという。

同じ最上郡の別の村では、457人の村の娘のうち、50人が「身売り^{みうり}」されたという。

(資料出所：家永三郎編『日本の歴史6』ほるぷ出版 1984年

p. 135～p. 142を倉橋が要約した。 説明文・写真とも)

